

おに
じゃんぐる
JANGLION!

Oni.1 ☆ Mermaid ☆





じゃんぐる☆おに

J O 制作委員会

J O とは？

ジャングルジムの上で行うオニゴッコのこと、複数でやるチェンジルール(タッチしてオニを入れ替える)と二人でやるポイントルール(タッチしてポイントをカウントする)があり、本作品では主に二人でやるポイントルール。五分間で交互にオニをやってポイントの多い方が勝ち、引き分けの場合は一分間ずつのサドンデスを行う。

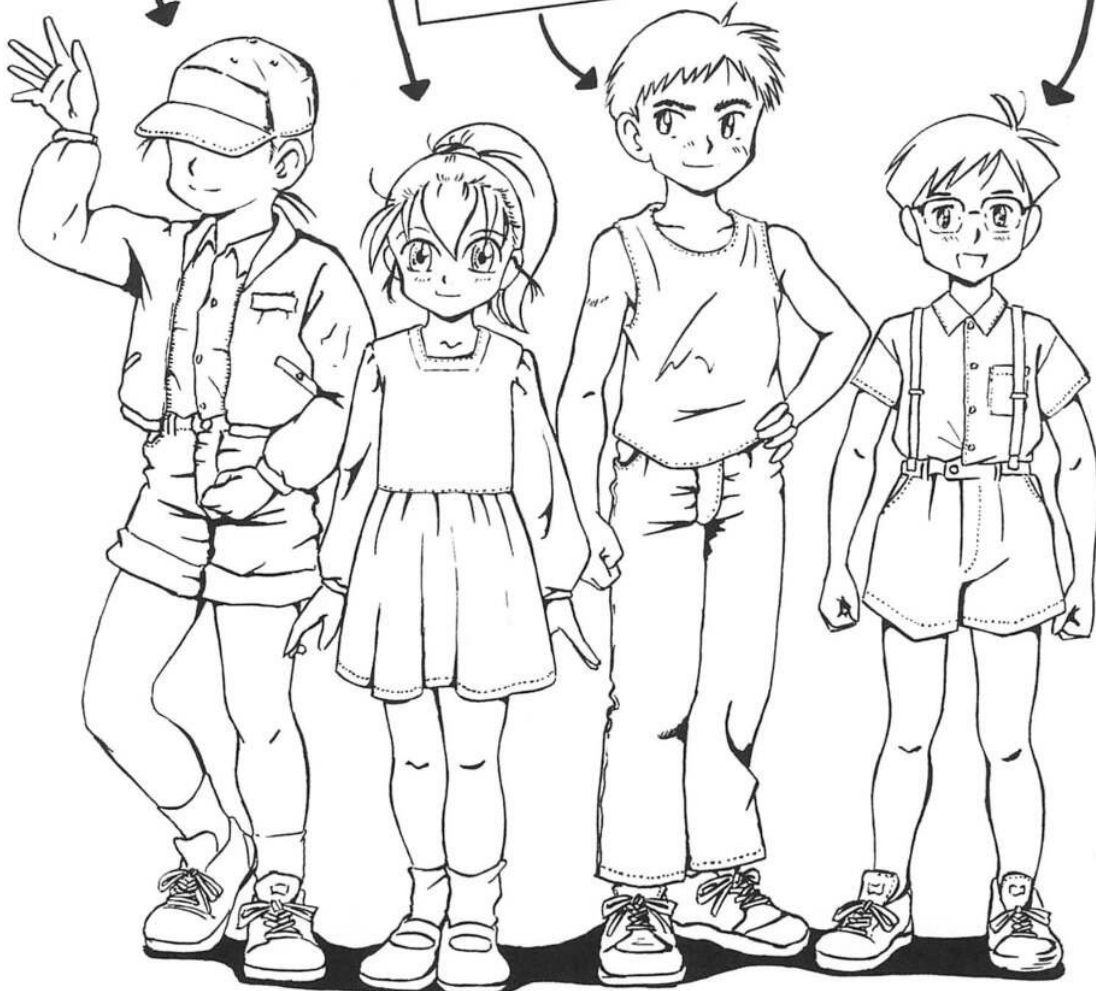
登場人物

七瀬 奈緒人 (12才)
ルックス良し、成績良し、
性格良しのクラスの人気者。
正義とは幼なじみの悪友で、
ジャングルオニでも好敵手
的存在。

山中 リエ子 (11才)
背が低く、顔立ちも幼いの
で小学六年生には見えない
が、学級委員長としてしっ
かりクラスをまとめる。正
義とは犬猿の仲。

桧垣 正義 (12才)
一応の主人公。名前に反し、
女の子を弄ぶ悪党でもある。
エロにこだわりを持ち、小
学年生にして中年趣味を持
つ。

松林 勇 (11才)
正義を兄貴分と慕う男の子。
気弱な所があり、イジメら
れやすい。家が実業家のお
金持ちで一人っ子の長男。



キーンコーンカーンコーン：。

終了の鐘の音がスピーカーから流れると静かだった学校にたちまち活気が溢れる。

「勇っ：早く行こうぜ」

ボロボロの黒いランドセルを、船乗りがズタ袋をやるように肩からさげ、少年が廊下を走る。同学年の中では背の高い方で、短く切られたスポーツ刈りと白いシャツから覗く日焼けした肌が健康的だ。

「待ってよ、正義君」

その少年を追いかける男の子は一見、女の子とも見えるくらい小柄で、背も低く真っ白い肌をしている。新品のランドセルはブランド特注品でその髪型といい、お金持ちのお坊ちゃまだった。

六年生のクラスがある四階から一階の昇降口まで一気に駆け降りると、靴を履くのももどかしそうに校庭へ飛び出した。彼らの行く先は校庭の隅にあった。

ジャングルジム。

細い鉄パイプを組み合わせてできた骨組で、お祭りのやぐらのような形をしている。登ったりくぐったりして遊ぶのだが、鉄棒や登り棒のように体育の授業で使われることのない

点や、滑り台のように比べて遊ぶ目的のハッキリしない点で人気がない。遊戯具としてはマイナーどころである。

二人は校庭の隅々に張られているボールネットにランドセルを引っかけると、急いでジャングルジムへ昇る。昇り始めの早かった正義がタッチの差で勇よりも早く頂上へ辿り着いた。

「俺、オニ！」

「ずるいよ、サヨウナラの礼がまだ終わってなかったのに」

不満そうに口元を尖らせる。

「えーっ、勇の方が廊下に近いんだから、ハデ付けてくれて」

「うーん：分かったよ。五分で一本、交替だからね」

ふざけながら手を合わせて頼む正義に、勇も折れる。

「正義っ！それに勇君まで、何やってるんだよ」

ジムの下から声がする。白いYシャツに真っ赤なスタジャンをピシッと格好良く着込み、これまた赤い帽子を目深に被った少年が二人を呆れたように見上げていた。

「遅かったね、奈緒人君」

「フハハハッ：今日こそ、お前を捕まえてやるからな」

能天気には笑う勇と正義に、奈緒人が頭を押さえる

「二人とも帰りの会の時、委員長の話聞いてなかったろ？」

「帰りの会？」

「委員長がどうしたって？」

「教室に残りなさいって言ったのよっ！」

「いつの間にか、奈緒人の隣に小さな女の子が立っている。おチビちゃん、フリルの付いた可愛い服を着る姿は小学三年生ぐらいいに見えるが、名札には六年一組、山中リエ子と書かれている。」

「ゲッ：委員長」

露骨に嫌そうな顔をする正義。

「どうして勝手な行動ばかりするのよ！」

「俺がなにしよう、俺の勝手だろう！」

自由行動をモットーとする正義とは、団体の生活の調和を考えるリエ子とはソリが合わないのだ。

「とにかく、早く降りてっ！」

「正義君、また何かしたの？」

「心当たりは山ほどあるけどな？」

二人はゆっくりとジムを降りた。

「：二人とも今後一切、ジャングルジムに触ることを禁止します」

刑を言い渡す裁判官のように冷たく言い放つ。
「なんだとっ！」

「どうしてっ！」

リエ子に向かって、口々に文句を言う二人の間に奈緒人が入る。

「話を聞けって」

「貴方たち二人には、他のクラスの女子から苦情がきてるの。特に桧垣君にはジャングルジムでスカートの中を覗かれたとか、ブラのホックを外されたとか、それはもう沢山！よって今後一切のジャングルジムへの接触を禁止させていただきます」

「僕が監視している時はオッケーだから」

人事のようにサラリと言う奈緒人。

「ちょ、ちょっと待て！なんでそんな大事なことを、そっちで決めちゃうんだよ」

「酷いよ、正義君ならともかく何で僕まで」

「ああっ！裏切ったな」

「だって、そうじゃないか、僕はやめたほうがいいって言ったのに正義君が無理やり：」

「成美ちゃんのパンツを覗こうって言ったのは勇だろ！」

「そ、そんなこと僕、言っていないよ！」

「いや、言いました：：グアアアッ！」

正義の股間に、奈緒人の蹴りが思いつき入る。

「いいから話を聞けって：二人ともそう言うと思っ、委員長から一つ提案があるんだ」
「てっ：提案？」
股間を押さえうずくまる正義が、委員長を

見上げる。

「そう、そのジャングルジムで勝負するの。私に勝ったら、この話はなかったことでもいいわ。ただし、負けた場合は今後一切、女子の着替えや身体検査の覗き、スカート捲りや強風スポーツでの待ち伏せ、放課後のブルマー漁りやスクール水着の試着、使用済みのリコーダーやスプーンを嘗める、等々の破廉恥極まる痴漢行為を全てやめてもらいます」

「お前：最低だな：」

正義を見下ろしながら、奈緒人が呟く。

「ジャングルジムで勝負って：ジャグルオニのこと？だって正義君と山中さんじゃ勝負にならないよ」

「やってみなくちゃ分からないでしょ。どう、受ける？それとも逃げる？」

挑戦的に正義を見下ろすリエ子。

「やって：：やろうじゃねえか」

「山中さん、そんな格好でやるの？」

勇がフリフリの付いた長いロングスカートを指さす。高低差のあるジャングルは動き回ると、下着が丸見えになるのだ。

「馬鹿っ：：余計なこと言うなって」

正義が勇の口を押さえるが、リエ子は平然としてゐる。

「スカートのこと？大丈夫よ、ちゃんと履い

てるもん：：ほらっ」

委員長が自らのスカートを捲り上げる。

「なっ！：：：なんだあ」

ガツカリした声をあげる正義。

「体操着だから平気だもん」

正義に紺色の体操着を見せつける委員長。しかし、正義の目はケダモノのような目付きで見慣れているとは言えスカートの中に見え

るそれは趣向が違い、下着にすら匹敵する興奮を呼び起こさせる。ましてや自ら捲り上げる行為と、そのスカートと白いスリッパがク

ロイズアップさせる細い素足や太ももは、強烈なインパクトがあった。

「：：ブルマーじゃ見ても：：つまらないよ

：：なあ：：」

「正義、目が懲役モノだぞ」

「じゃあ、始めましょうか」

ジャングルジムに委員長が手をかけると、

正義が急に冷めた目付きになる。

「どうしたの検垣君？」

「：：別に：：でも：：汚いよなあ：：」

聞こえるように独り言を呟く正義。

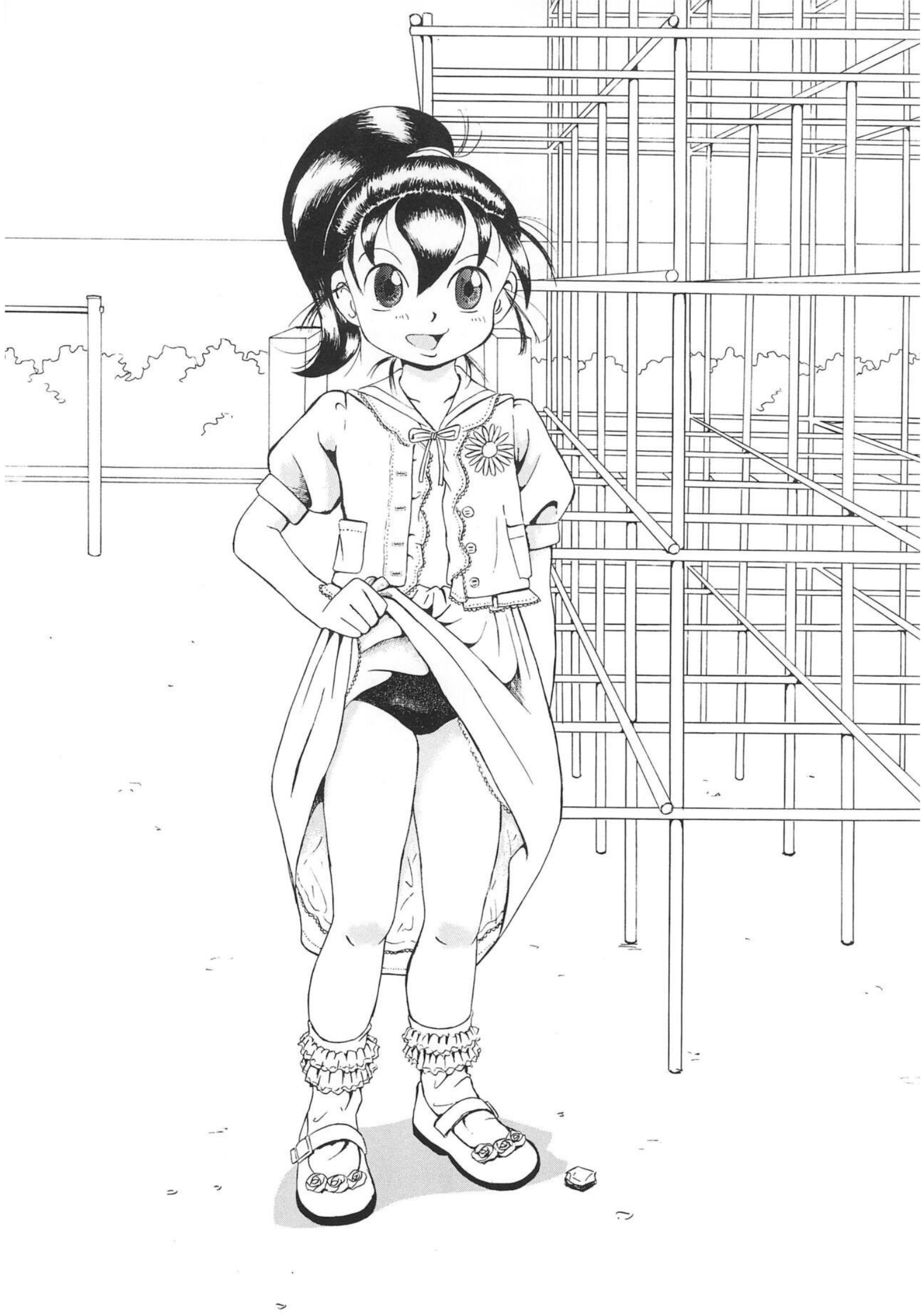
「何よ、文句があるなら言いなさいよ」

汚いと言われてカチンとくるリエ子。

「そのブルマー」

「ハア？」

「ジャングルジム法、第一条、ブラックパン



ツを禁ずだ。俺が勝ったらその悪しき黒パンを脱いでもらいたい」

「なに言ってるの？」

「委員長とオニゴッコしたって、全然、俺にメリットがないじゃん。しかも唯一の楽しみは黒パンが邪魔で見えないし：：フェアじゃないんだよな」

「：：：分かったわよ：：黒パンでも白パンでも脱いであげるわ：：その代わり負けたからさっきの条件を卒業するまで守ってもらいますからね」

「オーケーだ：：じゃあ始めようか」

急にやる気になった正義がジャンゲルジムに飛びつく。

「七瀬君、ルールブックを見せて」

「覚えられる？」

「大丈夫っ、任せといて」

リエ子が手書きのルールブックを開く。

（ジャンゲルオニとは、ジャンゲルジムの上ならどこに逃げても構わないオニゴッコのことです。本来なら二人でやるものではないので、手でタッチするごとにオニポイントが加算される特別ルールを作りました。

胴体をタッチした場合は2ポイント、胴体以外の頭手足をタッチした場合は1ポイント、なおリボンのはし、帽子のつば、はみ出したベルト、スカート、端など、身体の上からではない衣類だけのタッチは無効です。また故

意にこれらを引っ張ることを禁じ、故意でやった場合や悪質な場合はペナルティ2ポイント、もしくは反則負けになります。また暴力的なタッチやチャージもペナルティ2ポイント、もしくは反則負けになるから注意してください。

試合中に地面に落ちた場合はペナルティ2ポイントです。上着やスカートといった衣類はペナルティになりませんが、傘や杖など体を支えられる物が地面に触れた場合はペナルティ2ポイントになります。ここで気を付けなければならぬのは、オニもこれに含まれるということですよ。

ポイントを取った場合やペナルティを受けた場合、オニはそのスペースもしくはレーンの真下の地面に降りて、十秒数えてから試合を再開してください。

試合は十分で先攻と後攻の五分ずつ、同点の場合のみ一分ずつのサドンデスを行って勝敗を決めます）

「ポイントとはともかく、ジャンゲルジムの上だけでやるオニゴッコだよ。捕まえるか、逃げ切るかのね」

「分かった：：簡単よ」

「ウインクをしてリエ子がジムに飛び乗る。」

「どっちがオニをやるんだ？」

「初めてなんだもん、桧垣君でいいよ」

「そう言って、ジムの外側のバーを伝って移

動しようとするが、不慣れなせいとか動きがぎこちない。

「そんなんで俺と勝負しようなんて言ったのかよ」

正義は長い手足を使ってゆうゆうとバーを伝い、リエ子に接近する。

「委員長っ！正義は腕のリーチが長いから外側は不利だ、中に入っ！」

奈緒人のアドバイスに、委員長はジムの内側に頭から突っ込むが、床すら空洞になって、狭いジャングジムの中を這い進むのは、小柄なリエ子でも難しかった。

「違う、這い進むんじゃないんだ。脚から中に入っ、身体を仰向けに平行にしたら、手を使ってベルトコンベアーみたいに身体を前に送るんだ」

リエ子が慌てて頭を戻し、脚を突っ込むが既に遅かった。

「はいよ、タッチ：：サービスだ」

正義がポイントとリエ子の頭に手を乗せる。

「もう1ポイント：：一分たつてないのに」

「当たり前だ」

頭を掻きながら、緩慢に地面に降りる正義。

「イッチ：：ニッチ：：サント：：」

三十秒くらいかかって十を数える。

「：：この勝負：：正義の負けだな：：」

奈緒人が小さく呟いた。

手加減したのと、コツを覚えたりエ子の動きがだんだんと良くなったことで、正義がリエ子から取ったポイントは8ポイントだった。

「七瀬君、負けちゃったらどうしよう」

リエ子が不安そうな声を上げる。

「とにかく外側じゃ勝負にならない、思い切つて内側から勝負するんだ」

「付け焼き刃のアドバイスだな：：」

二人に呆れる正義。

「正義君：：」

勇が浮かない顔で正義のシャツを引っ張る。

「なんだ：：勇もアドバイスしていくか？」

「いや：：違うんだ：：山中さんの動きのことでチョット気になることがあって：：」

「気になる：：インサイドのプロの勇が？」

「気のせいかもしれないんだけど：：」

「正義、委員長がオニの番だぞ、早くジャングジムに上れ」

奈緒人が後半戦の始まりを告げる。

「分かったよ。まあ手加減したとは言え、8ポイントも取ってるし、余裕だろ」

「始めるよ、桧垣君」

リエ子がゆっくりとジムの中に潜り込む。

「あいよ：：ットオ！」

遅いはずのリエ子の動きが正義に近づいた途端、素早くなる。狭いジャングジムの中を器用にすり抜け、正義に迫る動きは先程ま

での緩慢な動きではなかった。スルリと内側に入る動きに無駄がなく、範囲に入るとすぐ前面を起こして、タッチのフォームになる。まるで魚のような素早い攻撃だった。

「早いよ！どうして？」

勇が悲鳴に似た声を上げる。

「近くの公園で、毎日練習してたんだよ」

リエ子の動きに満足そうに頷きながら、奈緒人が勇に答える。

「じ、じゃあ：：ルールブックを読んだり、奈緒人君が初歩的なアドバイスをしたのは：：」

「無論、ワザとだよ。あの馬鹿を油断させるためのね」

「二人で騙しやがって、卑怯だぞ！」

リエ子の鋭いタッチを寸でのとこでかわしながら抗議する正義。

「あのなあ、お前の苦情は僕の方にもいっばい来てるんだ。クラス委員長、副委員長として当然の行動だろ」

「それに作戦だもん、卑怯じゃないもん」

鋭いタッチで正義を追い詰める。

「くそお：：本気だしてやる」

「ターッチ：：あっ！」

今度は正義の動きが早くなる、外側の鉄棒をリズムよく正確に伝い、リエ子の背中側にアツと言う間に回り込む。

「へん：：実力さえだせばこんなモンよ：：」

「なにいいい」

後ろに回り込んだはずが、リエ子と向き合う形になっていた。

「2ポイントね」

ペトンと正義のおなかにタッチをする。

「なんだ：：どうしたんだ：：今の動き：：」

唾然とする正義。

「クイックターン：：」

勇が呟く。

「さすが勇君、一発で分かっちゃったか」

奈緒人が関心する。

「クリトリスターン？」

「クイックターン！水泳の授業で習っただろ」

奈緒人が怒鳴る。

「俺、スクール水着以外興味ないから：：」

「正義君、今、委員長が使ったのはプールで折り返す時に、水中で一回転して足でタッチするターンの応用だよ。狭いスペースの中で小さく身体を丸め前転して方向変換、身体を伸ばす際に脚で鉄棒を蹴って回転の勢いとプ

ラスさせる：：」

「さしずめ目金ターンだな」

逃げ惑いながら、正義が茶々を入れる。

「マーメイドターンだもん！2ポイント」

リエ子が頬を膨らませるながら、正義の腰にタッチした。

「マジかよ：：」

マーメイドターンがあるので後方には回れ



ない、かと言って正面や側面では絶えずタツ
チの危険にさらされるのだ。リエ子は真ん中
に陣取っていることで、少し動いただけで正義
を正面に捕らえることが出来るのだが、正義
はジャンブルジムの半径が大きい分、余分に
動かなければならない。かと言って、動き過
ぎれば矢のようなマーメイドターンの餌食に
なってしまう。疲労とプレッシャーに正義の
動きは封じ込められていった。

「ターツチ！」

「なんのおおお」
マーメイドターンの強襲を寸でのところ

かわす。

「ピーツ、委員長2ポイント」

奈緒人が冷たく言い放つ。

「ちゃ、ちゃんとかわしたろう」

文句を言う正義のズボンが奈緒人が指さす

と、パツクリと社会の窓が全開になっている。

「委員長長の指が引っ掛かったんだ。だからタツ

チと見なす」

「審判っ、厳しすぎるぞ」

「ピーツ、試合開始」

「時間はタツプリアあるし、私の勝ちね」

「余裕の表情で迫ってくる。私の勝ちね」

「ちつきしよう：：：あらっ：：：：：」

リエ子を見るとスカートが大きく捲れてい

る。体操着というところで気にかけていないブ

ルマーが露になり、白い素足と幼い太ももが

丸見えになっている。

「ターツチ」

「されてたまるかあああ」

伸びるリエ子の手をかい潜り避け続けるが、

勢い余って背後まで回り込んでしまう。素早

くりエ子がマーメイドターンの正義に迫った

その時：：。

「キャーッ！」

悲鳴が起る。

「どうしたの委員長！」

奈緒人が駆け寄り硬直する。

おチンチン。
タツチしようと手を伸ばした先にそれはあつ

た。トランクスの前開きを突き破り、リエ子

にコンニチハをしていた。

「あっ：：ああっ：：」

リエ子はあまりのショックに言葉がでない。

「起っっちゃった：：」

「起っっちゃったじゃない！」

奈緒人が怒鳴る。

「あんな可愛いブルマーを見せられたら、普

通は起つだろう」

「起つか！早くしまえっ」

「だって委員長タツチしてないぜ：：チンチ

ンは胴体じゃないから：：ほら1ポイント」

ショックで動けない委員長の手をチンチン

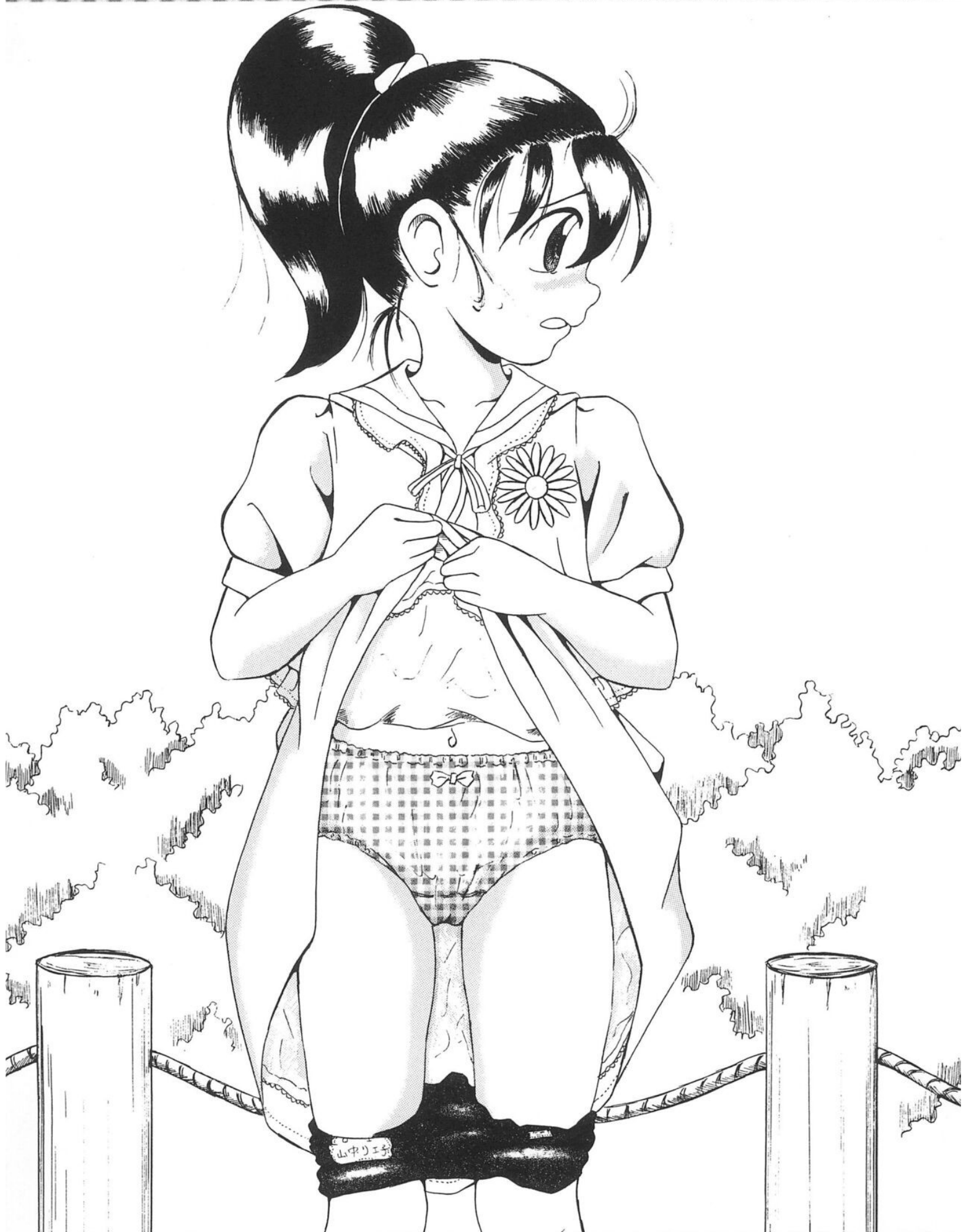
を擦り付ける。

「：：：あ：：ああ：：：あ」

「ちっちゃなおてでだねえ、おじさんまた起つてきちゃったよ」
リエ子の手の中でムクムクと大きくなる。
「：：：キャアアアアアアアアアアッ！」
慌ててジャングルジムを降り、昇降口の水飲み場へと走って行くリエ子。
「落下のペナルティで2ポイント、それにタイムを取ってないから試合は続行中、時間内には帰ってこないだろ：：：」
楽しそうに正義は呟いた。

「卑怯よ！」
十分程たって、手から石鹼の香りをさせたリエ子が帰ってきた。
「卑怯じゃないもん、作戦だもん」
リエ子の声色を真似る正義。
「：：：8ポイント対5ポイントで正義の勝ち：：：」
嫌そうに奈緒人が宣言する。
「うっしやあああ！」
奇声を上げて喜ぶ正義。
「七瀬君、あんなの反則でしょ」
リエ子が奈緒人に抗議する。
「反則以前の問題なんだけど：：：ルールには確かにない：：：」
奈緒人が頭を抱える。
「さて、委員長、約束を守ってもらおうかな」

ニヤニヤと笑う正義。
「分かったわよ、脱げばいいんでしょ、脱ぐからあっち向いてよっ！」
花壇の木陰に入り、背を向けるリエ子。
「奈緒人とグルになって騙した罰として俺が脱がせます」
「な、なに言ってるんの、駄目だよそんなの」
「そうじゃあ、自分で脱いでもらおうかな、黒パンと白パンを」
「えっ？」
「さっき言ってたよ：：：黒パンでも白パンでも脱いであげるわ：：：って：：：まさか委員長これ以上嘘つかないよね」
「うーっ：：：好きにきなさいよ！」
覚悟を決めて正義に向き直る。
「じゃあ、脱がしやすいようにスカートを自分でめくってもらおっかな」
「：：：くすん」
両手でスカートを捲り上げると紺色のブルマーが露になる。
「委員長はどんなパンツを履いているのかな」
ブルマーの両端に手を掛け、ゆっくりとずり下げていく。果実の皮のようにペロリと剥くと、紺のポリエステルの下から、ピンクと白のチェックのパンティーが覗いた。
「ママあ：：：」
恥ずかしさで涙目になるリエ子、スカートを持つ手が震えている。



「白パンじゃないんだ、チェックのパンツなんだ」

更に下に下げると下着が丸見えになる。正義の吐く息が内股をくすぐった。

「そんなとこ：アッ：息吹きかけちゃ：ンッ：やだ：」

「じゃあ、アンヨを片足ずつ上げて：：そういう子だねえ」

ブルマーを足から抜き取ると、リエ子は慌ててスカートを下げる。

「これでいいでしょ」

「へええ、これが委員長ブルマーか：：小さくて可愛いな」

実際、低学年サイズのそれは六年生が履くブルマーに比べて小さい。ポリエステル独特のサラッとした肌触りを楽しみながら、裏側にめくり返してリエ子の股間を包んでいた辺りをジッと見つめる。

「変なトコ見るな」

無視し、指で股間の布地を弄ぶ。

「触るな、馬鹿！」

まるで自分の股間を弄ばれているような慌てぶりでブルマーを奪取しようとするが、正義は顔を近づけ、股間に残る甘い汗の香りを楽しんだ後：

「変身、仮面ブルマー！」

おもむろに被り、決めのポーズを取る。馬鹿っっっ！阿呆っっっ！あんたなんか死

んじゃえっっっ！
リエ子の怒声が響き渡った。

「：：と言うわけで、第2ラウンドにいきた

いと思えます」

奈緒人が沈痛な面持ちで審判を始める。

「えーっ、もういいよ。夕焼けニャンニャン始まっちゃうし：：」

「小学生がそんなもの見るなっ！」

「とにかく、もう一回勝負よ。絶対にギャフンて言わせるんだから」

「ギャフン」

正義は静かに帰り支度を始める。

「：：：」

「正義君、意地悪しないで受けてあげなよ」

「だって今日、スーパード写真塾の発売日なんだぞ、本屋が閉まったら日課のオナニはど

うするんだよ。夜のオカズなしなんてやだぞ」

「ゴチャゴチャ言っていないで、ご飯くらい私

が作ってあげるわよ」

何を勘違いしたのかリエ子が間に入る。

「あのなっ！夜のオカズって言ったも、その

オカズじゃ：：」

「そうだよ山中さん、正義君のオカズって言

うのは：：ムグウッ」



「卑怯者っ！」
 十五分程たって、顔を洗い終えたりエ子が
 不機嫌そうに帰ってくる。
 「射精はいけないなんてルールはないぜ」
 「普通ないよ」
 「：：5ポイント対1ポイントで変態の勝ち
 ：：」
 仏頂面の奈緒人が試合終了を宣言する。
 「オッカッツ、オッカッツ」
 フリチンダンスを踊りながら奇声を上げる
 正義。
 「分かったわ、桧垣君の家に行つて何でも作っ
 てあげるわよ」
 「委員長：：」
 「そのオカズのコトなんだけど：：」
 奈緒人と勇が耳打ちをする。見る間に顔が
 真っ赤になるリエ子。
 「わ、私：：塾があるから：：これで：：」
 慌てて帰ろうとするリエ子の前に、正義の
 フリチンダンスが立ち塞がる。
 「オッカッツ、オッカッツ」
 「ちよつと桧垣君：：」
 「オッカッツ、オッカッツ」
 「あの：：」
 「それオッカッツ、それオッカッツ」
 「：：分かったわよ、オカズでもデザー

トでも好きにすればいいでしょ！」
 ヤケになって叫ぶリエ子だった。

校庭の隅にある体育用具室。薄暗い部屋の
 中で、リエ子と正義が向かい合っている。
 「オカズってどんなことすればいいのよ」
 「うーん：：まずはストリップをしてみらおっ
 かな」
 「ストリップ？」
 「服を一枚ずつ脱ぐんだよ、俺の前でね」
 「そ、そんなこと：：」
 「オカズになるんだよね」
 「：：：：覚えてなさいよ」
 プチン：：プチン：：
 小さな指が白いブラウスのボタンをゆっく
 りと外していく。
 ジー：：：：パサッ。
 ジッパーを下ろし、ロングスカートがスル
 リと床に落ちると、純白の薄いスリッパ一枚
 に包まれたリエ子が露になる。両手で前を押
 さえ隠そうとするが、その仕草がまた可愛かっ
 た。
 暗い体育用具室に差し込む僅かな光が当た
 り、幼児体型のぽちゃつとしたラインを浮か
 び上がらせる。
 「ブラはしてないんだ」
 「ママがまだいらないうって：：」



「可愛いオッパイだもん」
リエ子の胸はようやく発育が始まったばかりで、なだらかな胸板にほんの少しこんもりとした起伏があるだけだった。

「：：：」
悔しいのか恥ずかしいのか、顔が赤くなる。

「チェックは好き？」

スリッパの下に透けて見えてしまっているパンティーを見ながら、意地悪く聞く。

「：：：」

コクンと恥ずかしそうに頷く。

「そろそろ手を下ろしてもらおうかな」

「え：：でも：：」

「駄目なの？」

「だって：：：私の：：小さいから：：」

「小さいから」

「見てもつまんないよ：：ガッカリすると思

う：：お子様だもん」

「この前のこと気にしてるんだな：：」

コクンと頷くリエ子。

身体検査の際、クラスの子の中でリエ子だけがブラジャーをしていなかったことがあったのだ。サイズ的にはリエ子とさして変わらない女子もいるのだが、見栄としてブラを着けてきていた為、リエ子だけが上半身、裸で検査を受けたのだった。少年のようなオッパイを一生懸命、両手で隠しながら検査を受ける姿を正義は知っていた。

この後、心ないクラスの子から男子に伝わり、未熟児だの、発育不良のお子様だの、ノーブラ委員長だのと、酷いからかわれ方をしたのだ。
「気にするなって、あの後、誰も言わなくなつたろ」

誰も知らない裏で、正義と奈緒人の二人が、リエ子をからかった男子を実力行使のともなった注意をしたのだが、それは言わなかった。

「でも：：でも：：」

「俺も悪かったよ。可愛いオッパイだなんて

言ってゴメン：：お詫びにおまじないをして

あげるよ」

「おまじない？」

「将来、オッパイがZカップになるおまじない：：ほら手をどけて：：」

「えっ：：うん：：」

両手を脇にどけると、うっすら透けた胸が見える。

「いくよ：：」

こんもりとした左右の膨らみに、スリッパ

ごしにキスをする。

「あっ：：：」

小さく声を上げるリエ子。

「よし、これでZカップ間違いなし！：：：

：：そろそろ帰ろっか」

笑いながらリエ子の服を拾い、埃を綺麗に

はたく。



「：：：待って」
「うん？」

リエ子がポニーテールを縛るリボンを解く。
ファサツ：：。

長い黒髪が美しく流れ落ち、少女を夕日の
光で輝かせる。リエ子はスツと身体を開き、
正義に裸身を晒すように見せつけた。

「：私を：オカズにして：」

「山中：：でも：」
リエ子の乱れた髪が色っぽく、正義はドキ
ドキしてしまう。

「：オカズに：ならないかな：」
哀しそうに俯く姿にそそのめるものがある。

正義の限界でもあった。
「なるなる！いただきますっ！」

サルのようにチンチンをしごき始める正義。
「桧垣君：ねえ：なんだか：もうさっ
きのが出そうだよ：ちょっと聞いている：
ねえ：出そうだよ：ねえってばあ！」

「委員長つつつつっ！」
ドピュルツツツツツ！

「：：：キャアアアアアアアアアア！」

この後、リエ子は三回目の昇降口の水飲み
場へ駆け込むことになった。

「もう、最低っ！」
ホッペを膨らませるリエ子。

「ゴメンて：：」
必死に謝る正義。

日は暮れかかろうとしていた。真っ赤な夕
日が二人を赤く染める。勇と奈緒人は氣を利
かせたのか呆れたのか、既にいなかった。

琥珀色の帰り道を歩きながら、ひたすら謝
る正義にソッポを向いていたリエ子がようや
く機嫌をとり戻す。

「分かったわよ：許すから：返して」
スツと手を差し出す。

「何を：」

「ブルマー！」

「おっと：：そうだ」
ポケットから取り出したそれをリエ子に手
渡す。

「あれ：：なによコレ：」

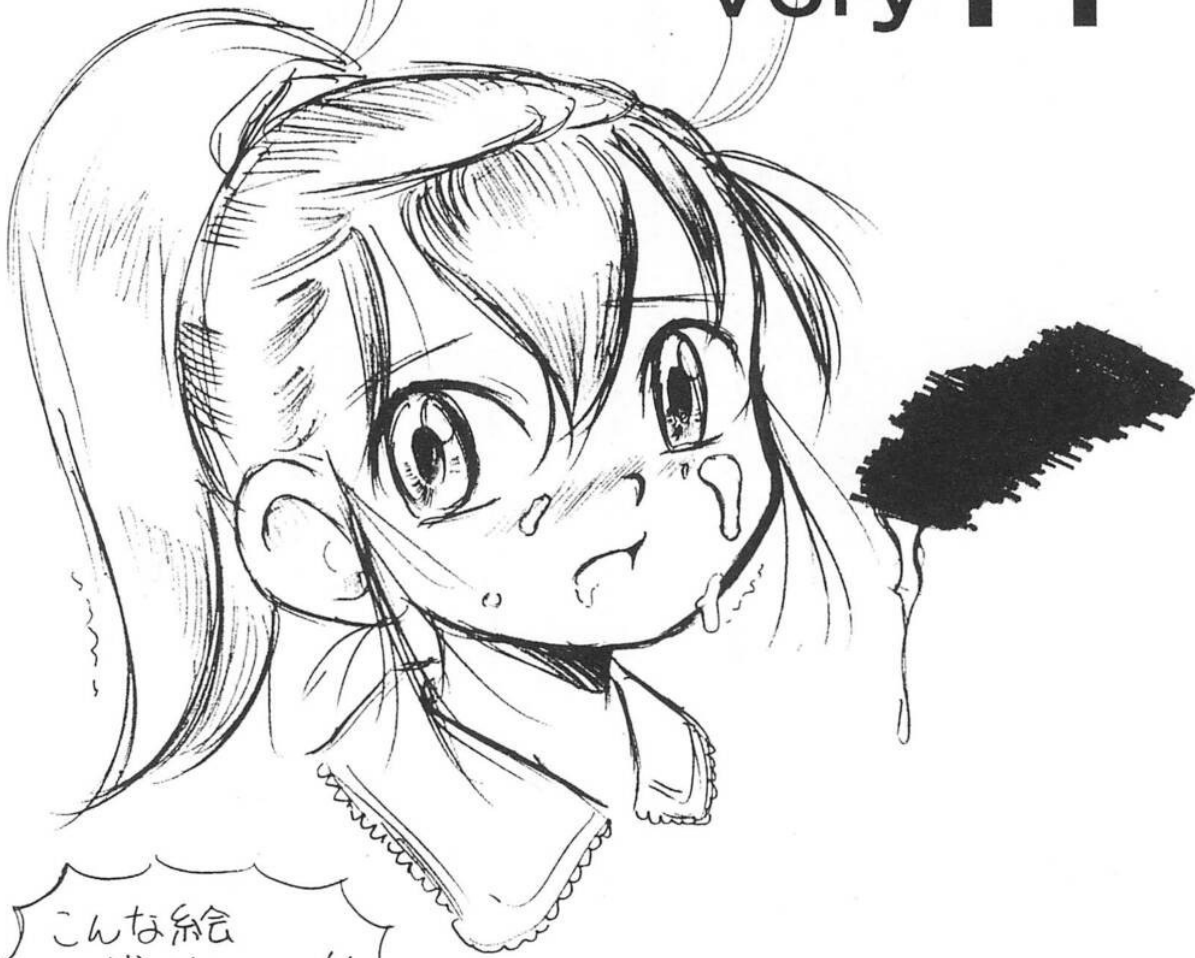
ブルマーがパリパリに張り付いていた。
「あ：：いや：拭くものがなかったんでつ
い：：：そうしたら気持ちよくなって更につい
：：」

「ついじゃないっ！」

バリバリとリエ子の爪が正義の顔を掻きま
る。血まみれの正義が気絶する前に見たもの
は、夕日を背負いアッカンベーをするリエ子
の姿だった。

終わり

じゃんぐる・おに very H



こんな絵
描くなーっ!!



前回のあらすじ

特殊な遊戯具、ジャングルジム。この鉄パイプをつたった追いかけっこをジャングルオニと言う。このジャングルオニが大得意なスケベでエッチでエロエロの小学生、桧垣正義にクラス委員長である山中リエ子が挑戦を叩きつけた。スカートめくりや覗きといった学校内でのあらゆるスケベ行為の禁止をかけた勝負だったが、リエ子側の狡猾な作戦と必殺技、マーメイドターンに追い詰められてゆく正義。だが、ふとした接触で壊れたチャックからブルンと飛び出した奥の手とドブツと飛び出してしまった奥の手で、見事、リエ子を打ち倒すのであった……。

「マーメイドターン！」

鉄パイプを正方形に組み合わせた遊戯具、ジャンゲルジムの中を少女が素早く駆ける。

「っとおとおお！」

ジムの外周を伝っていた少年が少女のタッチを間一髪でかわしたところで笛の音が鳴った。

「ピーッ、時間切れ：：委員長5ポイント、

正義：：6ポイント：：正義の：：勝ち：：」

二人のジャンゲルジムでの追いかっこを審判していた少年はその結果を嫌々に宣言する。

「あーっ、もうちょっとだったのにー」

少女が悔しそうに頭を振ると、大きなポニーテールが可愛らしくフルフル揺れる。

「ハアハア：：まだ：：ハア：：まだだな：

：ハアハア：：」

少女に追われていた少年が髪までビッシヨリと汗に濡らしながら、激しく息をつく。

「惜しかったよ。この前よりも動きが良くなったし、特訓の成果が出てたね」

審判をしていた少年、目深にかぶった帽子のせいで分かりにくかったが、悔しそうな表情がチラリと伺えた。

「ありがとう。七瀬君のおかげよ」

「：：ハアハア：：」

「委員長が頑張ったからだよ」

「教え方がいいんだもん」

「：：なあ：：あなさ：：」

「そんなことないって」

「また特訓してね」

「お前ら：：」

「時間あるし、今日のおさらいでもしようか」

「無視するなっ！明日の特別授業、俺も出させてもらうからな！」

「あのなあ、あれは女子の為だけに行われる

授業なんだぞ、身体の仕組みだとか：：その

：：女性としての：：現象だとか：：勉強するんであって、男のお前が受けてもしょうがないだろう」

「そうよ、男子は自由時間なんだから、外で

沢山、楽しく遊べばいいでしょ」

「俺は女子の身体の仕組みとか現象を沢山、

楽しく勉強したい！」

「駄目だって言ってるんだ！」

「男子がいると女子が恥ずかしがるのよ」

「約束したじゃないかあ」

「あれは：：授業の内容ぐらいなら教えられるという意味で：：」

「約束う、約束う」

「お前なあ：：」
「私が良くってもクラスの女子が反対するに決まってるじゃない」
「：：へえ：：委員長はいいんだ：：」

「あつ：：成美ちゃんが奈緒人のこと、さっき探してたんだ！」
ランドセルを忘れたリエ子につきあって教室まで来た時、正義がフイに思い出した。

「成美ちゃんが？」
「鍛治さんなら、さっき帰っ：：ムグウ」
正義の片手がリエ子の口を塞ぐ。
「なんか大切な話しがあるとか言ってたなあ：：」

「お前は、どうしてそういうことを忘れるんだよっ！」

「鍛治さんは帰：：ムムグウッ」
両手で塞ぐ。

「まだ探してるんじゃないかな：：いや、探してるに違いない！」
「：：ちょっと見て来る：：校門で待っててくれ」
教室を出る奈緒人。

「ムムムウウウツツツ！」
「さてと：：」
スッと手を放す。
「ちょっとなにをするのよっ！だいたい、鍛治さんなら：：」
「帰ったよ。俺も成美ちゃんにバイバイって言ったもん」

「じゃあ、なんで：：」
「特別授業の邪魔になるからねえ、今日の」
「特別授業：：今日？」
「女の子の身体の仕組みとその現象について」
「そんなこと言っても、機材のスライドも資料のプリントもないわよ」
「なにをおっしゃいます。そのものがあるじゃないですか、山中リエ子さん♥」
輝いた瞳でリエ子を見つめる。

「ま、まさか：：」
嫌な予感にあせる。
「頼む、委員長。男子として、いや人間としてどうしても知りたんだ」
「ダ、ダメに決まってるでしょ！」
「勉強したいんだって、マジで。日頃の覗きやスカートめくりだって、そういった知識欲からくる研究活動であって：：あー、俺はただ女性の身体というものを知りたいだけなん

だって、クラス委員長ともあろう人がなんで
理解してくれないかなあ：：」

失意にうなだれる正義。

「ちょ、ちょっと桧垣君：：」

「ドーせ、俺みたい男が純粹な向学心を持っ
たところで、スケベ野郎としか見られてない
んだな：：傷つくよなあ：：ハア」

「そんなこと言ったってダメなもの：：」

「友達にさえ、信じてもらえないのか：：」

ガツクリとへたれこむ。

「：：：分かった：：わよ」

今日もまた騙される委員長であった。

「タラララッタターン♪タラララッタタタ
ーンタターン♪お客様、踊り子さんにはお手
を触れぬようお願いします」
「へんな音楽をつけないでっ！司会もしない
でっ！」

フリフリの可愛らしいブラウスを脱いでい
くと薄いスリッパがシースルーとなって淡い
肌色を浮かび上がらせる。

「今日もブラなし？」

「う、うん：：」

恥ずかしがり、くるり背を向けてスリッパ
を脱ぐとポニーテールがフワッと揺れる。そ
の黒髪の下にある白い背がなんともなまめか
しく見えるのだった。

ストーンとロングスカートが静かに落ちて見
える濃紺のブルマーが小学生らしさをかもし
出す。

「どうしたの？」

後ろ向きのまま、モジモジしているリエ子。

「だって：：その：：」

オッパイと言うにはまだ少年のような胸に
コンプレックスのあるリエ子はたまらない恥
ずかしさでいっぱいだった。

「Zカップのおまじない：：してあげようか
？」

「え：：あ：：」

戸惑うリエ子を少し強引に振り返らせる。

「クスッ：：俺はこのままでも可愛いと思
うんだけどな：：十分、魅力的だよ」

「：：：：」

顔を真っ赤にするリエ子。

「チュ：：」

「：：：ンッ」

まだ肌色に近いピンクの先っぽにキスをさ
れると、ピクリと震えた。



「：：チュウ」
「アンツ：：」

更に軽く吸われるとリエ子はビクリと震え、あわてて胸に手をやろうとするのを正義が手で抑える。

「大丈夫だよ：：こうして刺激を与えるとオッパイが大きくなりやすいんだ」

チュウチュウとオッパイを吸い続ける。

「：：ン：：アツ：：：：ハア：：ンツ」

まだ、日が暮れていないとは言え、薄暗くなりかけてきた誰もいない教室。上半身裸のままのブルマー姿で、同じクラスメイトの男子に発育途中の胸を弄ばれている自分の姿に恥辱以外の気持ち良さを感じてしまう。

「ペロッ：：ペロペロ：：」

悪乗りした正義の舌が可憐な乳首を嘗めあげている内に微かにその先っぽがしこりをもち始める。

「ア：：ン♥」

痺れるようなその感覚に思わず甘い声が出てしまう。明らかにそれは小学生の、しかも学級委員などという役につくような少女の声ではなかった。

「クスクス：：」

正義が顔をあげる。リエ子の可愛いオッパ

イが唾液でエッチに光っていた。

「あ：：」

恥ずかしさに胸を隠そうとするが、手を抑えられてはそれもままならない。じつくりと鑑賞する正義。

「手で隠しちゃ駄目だって：：そうだ：：」

ロツカーに放り込まれてあるプラスチック製の縄跳びを見てほほ笑んだ。

「ちょっと、解いて：：んっ」

ピンク色のカラー縄跳が後ろ手に揺れる。剥き出しになった上半身を隠そうと、もがく姿がなんともなまめかしい。

「どうしたの委員長、ちっちゃなオッパイが丸見えだよ」

恥ずかしがるリエ子を楽しむ正義。

「馬鹿っ：：見ないで：：」

「見ないと、女の子の身体について勉強にならないじゃないか」

「でも：：」

「なるほど、オッパイはこうなっていたのか：：勉強になるなあ」

「涎、垂らしながら言うなあ！」

「さて、次はブルマーか：：」

下の体操着に目をやる。

「だ、駄目だよ：：それは駄目っ」

慌てるリエ子。

「駄目もなにも、その手じゃ脱げないよね」

「で、でしょ。だから勉強は終わりに：：」

一瞬、ホッとするが。

「俺が脱がすの手伝ってあげればいいんだ」

おもむろにブルマーに手をかける正義。

「えっ：：エエッ！」

唐突な発想に、気が動転するリエ子。

「低学年用か：：ホント、可愛いなあ」

紺色の人工布に包まれた腰つきを鑑賞する。

「：：ああっ：：ち、違うよ：：それは：：」

正義の指がブルマーの内側から更に一枚下

に潜り込んだのだ。このままではパンティー

も脱がされてしまう。

「違うって、なにが？」

「だって、ブルマーを脱がすんじゃ：：」

「そうだって：：じゃあ、お願いしてみてもよ」

「お願い？」

「なにを手伝って欲しいのか、言ってみてよ。

誰の何を脱がして欲しいのかをね」

「そ、そんなこと、言えないよお：：あっ！」

僅かにずり下げられる。本来ならパンティ

ーに隠されている、おへその下の白い肌が微かに覗けた。

「委員長のアソコって生えてるのかな」

更にずり下げようと力を込める。

「：：：：リエ子の：：ブルマーを：：脱がして下さい：：お願いします：：」

真っ赤になった顔を背け、たどたどしく咳

く。

「よく言えました。じゃあ、お願いされたブルマーを脱がしてあげるからね」

ゆっくりとずり下げられると、子供用のキャ

ラクターパンツが露になる。白生地に可愛らしいネコをプリントされた下着が野暮ったさ

と不思議なエッチっぽさを演出する。

「コンニチハ、ニャンコちゃん」

正義がパンツに向かって話しかけると、リエ子が真っ赤っ赤になってしまう。

「や、やっぱり：：駄目だよ：：あっ！」

太ももの辺りまで脱がされると、股間の裏

地が剥き出しになる。ブルマーとはいえ、パ

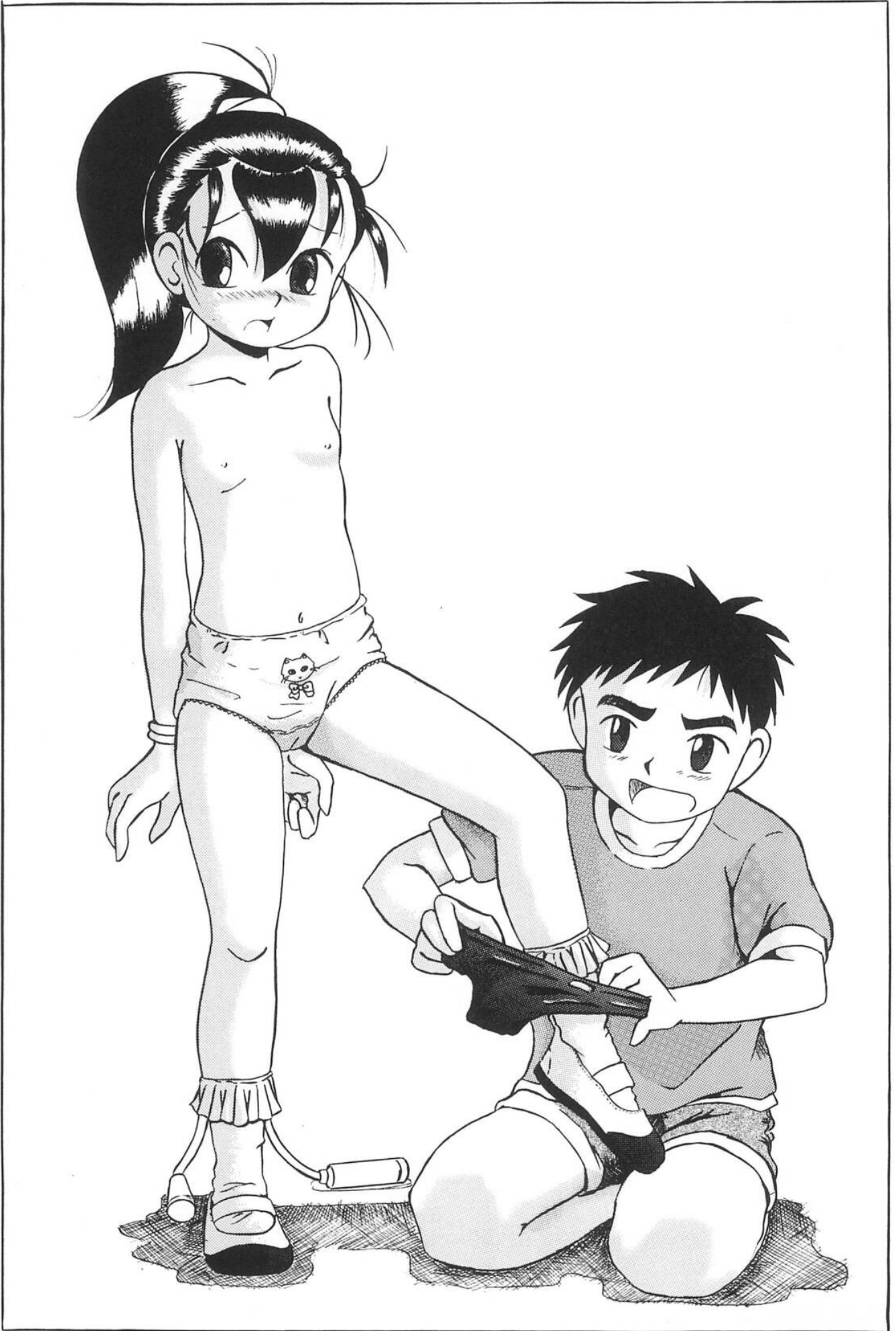
ンツごしにアソコに触れていた部分が男の子

に見られてしまうというのは、気恥ずかしさ

があった。

「少女の生ブルマーを直に脱がす：：男の夢

だよねー」



「松垣君の夢って：：一体：：」

スルリ：：。

本来、体育の時間に見慣れているはずの太ももが下着姿だと、妙になまめかしく見える。

「委員長、アンヨを上げてね」

「う、うん：：」

ブルマーが足首から抜きとられていく。幼い子供が着替えをさせられるようなポーズと、同じ年頃の少年にいいように脱がされている自分に屈辱と恥辱を感じる。

「さあ、もう片足だよ」

「：：：：うん」

左足を上げる。脱がされるだけではなく、脱がされやすいようにポーズをとることに、背徳感の入り混じったドキドキがリエ子の小さな胸の内を熱くさせていった。

「ンッ：：ンンッ：：」

静かな教室に少女の吐息が甘く響く。

教室の最前にある教卓に座らせられたリエ子が幼い身体を悪戯されて悶えているのだった。後ろ手に縛られ、教卓に磔にされた姿で口に自らが履いていたブルマーを啜えさせら

ている。

「ほらほら、しっかり啜えてないと落っこちちゃうよ」

笑いながら、リエ子の胸を撫で回す。

「ンッ：：ムムッ：：ン」

「約束だからね、落っこしたらパンツの中を見学させてもらうって：：」

縛られたリエ子の前にしゃがみ込むと、最後の一枚、その股間の部分をじっくりと観察する。

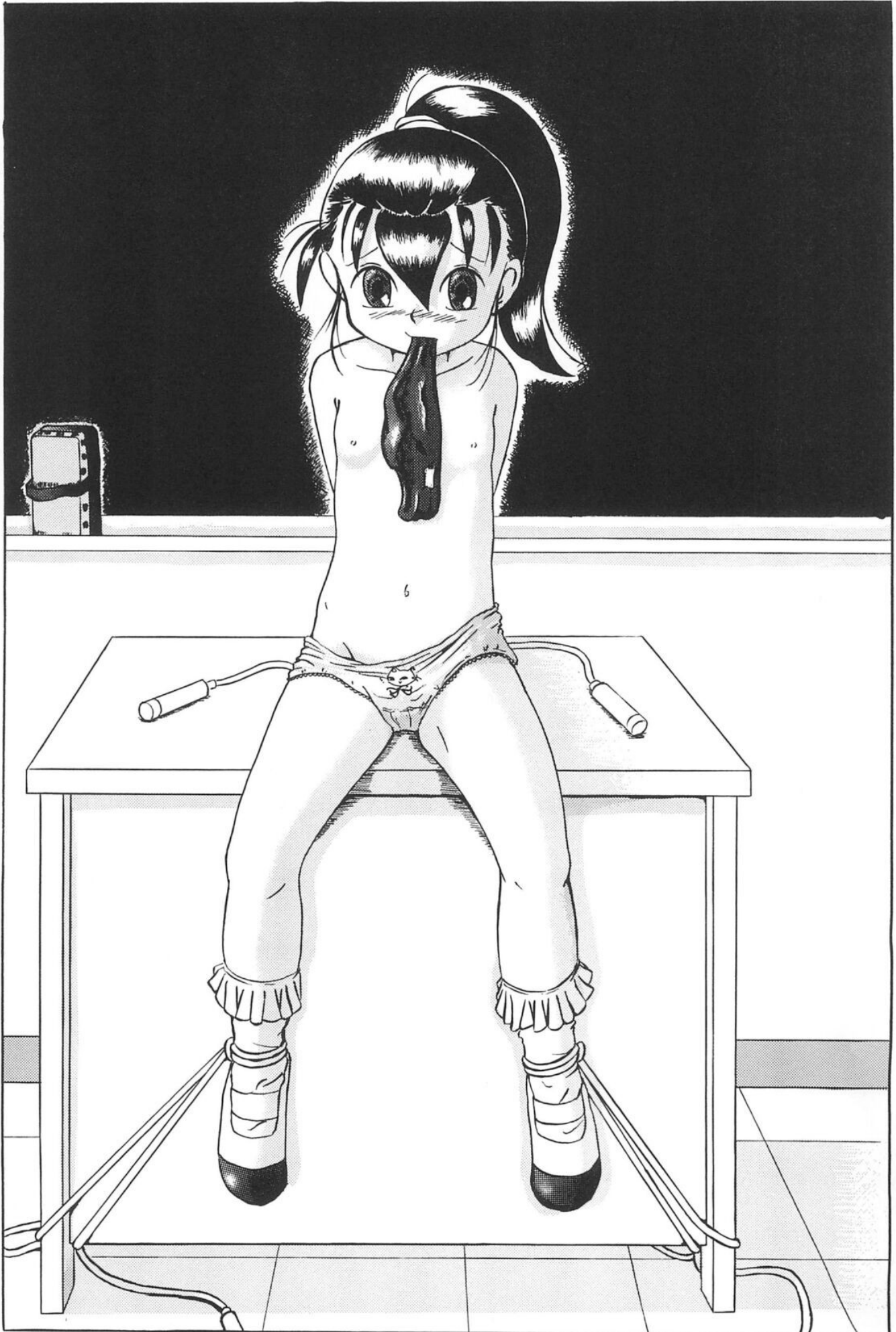
「ン：：ムウ：：ッッ」

開かれた脚を懸命に閉じようとするが、縛っている縄跳びを軋ませるだけだった。足首の縄跳びは手首の縄跳びと後ろ側で繋がって、もがいて教卓からずり落ちそうになるほど、リエ子の脚をはしたなく開かせる。ひっぱられているとはいえず、見て下さい♥と男の子の前で脚を開く格好は小学生といえども淫らな姿だった。

「女の子のパンツって、なんでオシッコ用の穴がないんだらう：：調べてみるかな」

ニャンコパンツの端に指をかけるとクイッと軽く引き下ろす。リエ子のおへその下の白い滑らかな丘が僅かに覗く。

「ンンッ！ムムウウッ！」



首を激しく横に振って抗議するリエ子。羞恥で真っ赤な顔に、目には涙さえ浮かべている。

「女の子のパンツの調査だから、ちょっとガマンしててね：：」

ペロリと引き下ろしていく。露になっていくツルンとした無毛の小さな丘：：。

「駄目っ！見えちゃうよっ！」
そこが限界だった。

「また脱ぐの手伝ってあげようか？」

教卓の上に立ち、パンツに手をかけたまま躊躇するリエ子に正義がトドメを刺す。

「：：：：」

無言のまま、自らの手で引き下ろし始める。

：：：：パサリ：：。

少女の最後の砦が陥落した。

「フーン。ニャンコパンツ姿の委員長もいいけど、上履きと靴下の上は全裸っていうのもなかなかマニアックでいいよな：：」

言われ、慌てて手でオッパイとアソコを隠すリエ子。

「：：：見ちゃ：：ダメ：：」

可愛い声とセリフが男の嗜虐心をそそらせる。

「隠さないでよ、委員長。特別授業なんだからさ」

「でも：：いけないコトだよ：：こんなコト」

「いけないこと？委員長が俺に裸を見られてエッチな気持ちになってるから？」

ビクリと震えるリエ子。

「エ、エッチな気持ちになんて：：なってないもん：：」

バツが悪そうにうつむく。

「じゃあ、いけないコトじゃないじゃない。むしろ、いいコトだよ」

「：：：いいコト？」

「だって、落ちこぼれの俺に勉強を教えられてるんだよ。いいコトじゃないか」

「検壇君：：保健体育5じゃなかったけ：：」

「さあっ、勉強を始めよう！」

「：：：：」

ジト目で睨むリエ子。

「そ、それでは山中リエ子先生。お願いします
す：：本日の超難問題！」

「：：超難問題って：：：まさか：：」

下腹部に正義の熱い視線が注がれているのに気づき、オッパイそっちのけで、両手でア

ソコを隠すリエ子。

「女の子にオチンチンがついているのか、いないのか、女の子のオチンチンの勉強だ！」
「つ、ついてないわよ、ついてるわけないでしょ！」

「見てみないと分からないじゃん。二本あるかもしれないし……」

「あるかっつっ！」

「授業が終わらないよ。早くしないと、用務員さんが見回りに来るかもな」

「エッ……」

「素っ裸で教卓の上に立ってる委員長を見たらどう思うのかな、露出狂の変態さんって思われるかもな」

「私、露出狂の変態さんじゃないもん……」

「六年一組の委員長はエッチな女の子だって噂が立つかも……裸を見られるのが大好きな女の子だとか……大変だねー」

「……グスン……：見たら……：終わりだから……ね……」

おずおずと両の手をどけてゆくと、無毛の白いスリットが晒される。

「へー、まだ全然生えてないんだ。ツルンてしてて可愛いな」
「んっ……」

まじまじと女の子の部分を観察され、手で隠したくなるのを懸命に堪える。

「こんな大切な所を俺なんかに見せちゃっていいの？委員長」

正義はリエ子の隠したい衝動に震える指を見つめ、楽しみながら言葉で嬲り続けた。

「くっ……んん……」

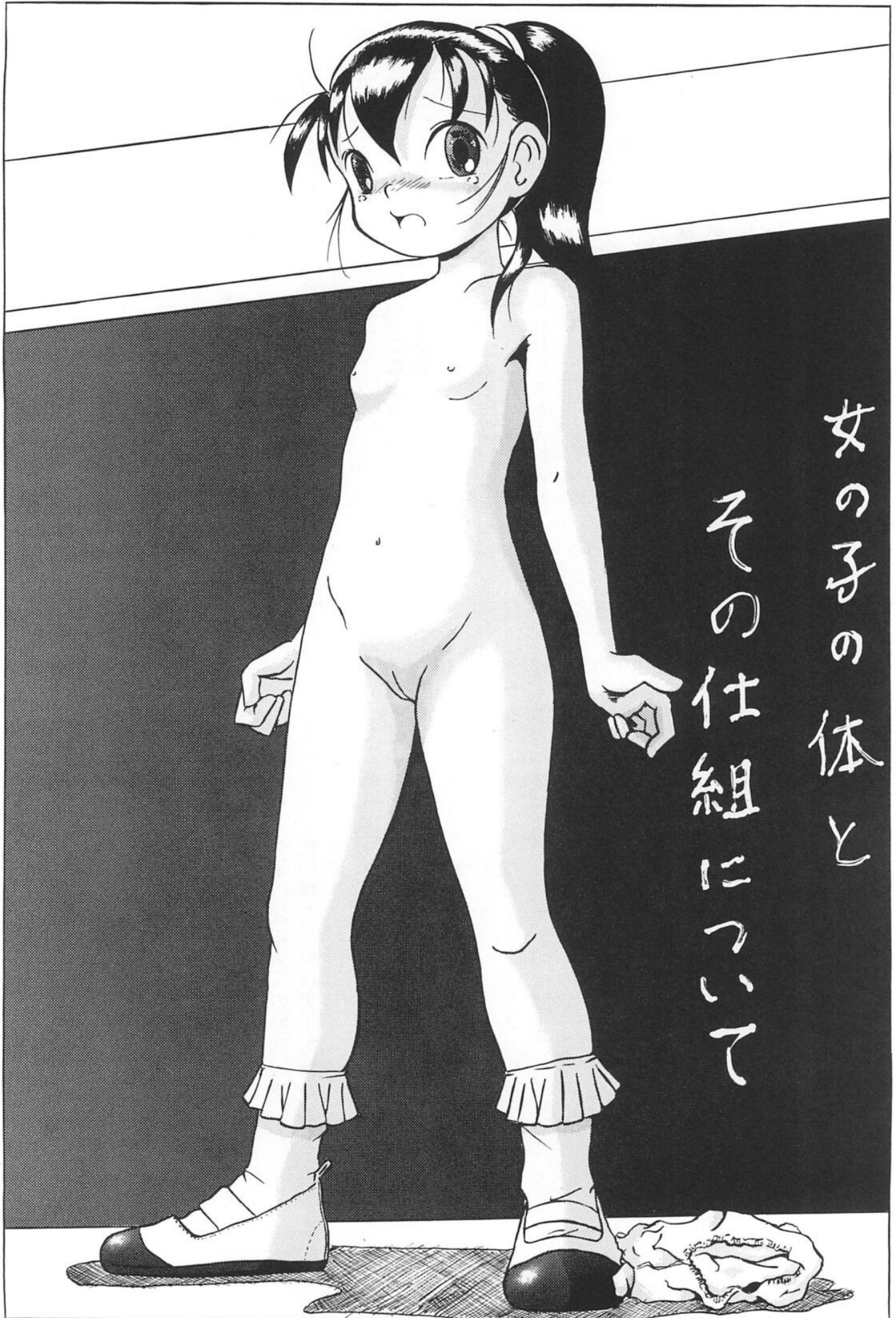
「そうだ、明日、女子の後に男子の特別授業もやろうか？委員長の裸を見れば男子も分かりやすいし、喜ぶと思うよ」

「えっ……そんな……駄目だよ……」

「女の子の体とその仕組について……：クラスの男子全員が委員長のオッパイやアソコを見て勉強するんだ……：触ったり……：揚げたり……：たっぷりとね」

「そんなの……：そんなの……：グスグス……：駄目……：だよ……」

クラスの男子全員が見つめる中で、全裸のリエ子が教卓に立ち、膨らみかけの胸や無毛のスリットを好奇の目に晒すのだ。まじまじと見つめる男子やニヤニヤと笑う男子、リエ子の幼い体をからかう男子、そんな中でオッパイを触られ、アソコを上げられる……：あまりの恥ずかしさに震えてしまう。ただ、それ以外にも何かゾクリとしたものを感じてしま



女の子の体と

その仕組みについて

うのだが、今のリエ子にはそれがどうい
うとなのか、まだよく分からなかった。

「あっ、ちょ、ちょっと：：ゴ、ゴメン：：
調子に乗り過ぎた：：冗談だよ：：俺が悪か
った」

涙ぐむリエ子に慌てる正義。

「だって：：だって：：」

「大丈夫、俺の可愛い委員長をそんな目に合
わせたりしないって」

「桧垣君：：っていつの間になんな所にい
るのよお！」

リエ子の真下からかぶりつきでアソコを鑑
賞している正義がいた。教卓にひじと頭をの
せ、少女の秘部を見上げながら、ニヤニヤと
涎を垂らしている。

「いい眺めだよなー。可愛いスリットが丸見
えだ。ピッチリ閉じちゃって：：クスクス」

「桧垣君：：」

あることに気が付いたりリエ子が後ずさる。

「駄目だよ委員長、よく見ないと男の子と
女の子の違いが分からないじゃないか」

「あの：：桧垣君：：」

更に後ずさる。

「フーム。やっぱり女の子にオチンチンはな
いんだよなー」

「オチンチンなら、ここだろっっ！」
ドムムムウウツツツ！

鬼神のような顔をした奈緒人の蹴りが正義
の背後から股間を直撃する。トゥーキックが
オチンチンをえぐり上げ、粉碎する。

「：：：：ノォ！」

断末魔の叫びを上げ、泡を吹く正義。

「先に帰ったと思ったら、こんな所で：：っ
たく：：塾に行く成美ちゃんに会って良かっ
たよ」

「よ、良く：：ない：：」

「委員長、大丈夫？変なことされなかった？」

正義を無視して、リエ子に自分の着ていた
スタジャンを肩にかけてやる奈緒人。

「う、うん：：私なら：：それより桧垣君が
：：」

教室の床を転げ回る正義を心配するリエ子。

「こいつなら大丈夫：：これで女の子と男の
子の違いがよく分かったろ。なっ！」

「：：と、とりあえず：：今は女の子になり
たいっす：：って言うか：：玉潰れてたら女
の子っす：：」

悶え苦しむ正義を置いて、教室を後にする
二人だった。

終わり

ジャングルオニ・マーメイド

「行っけえええ」

リエ子は四肢を丸めグルンと前転する。窮屈な姿勢を一気に解放させると、縮めた脚で思い切りバーを蹴りあげ、その推進力で得た勢いととも両手を大きく突き出した。

「させるかっ」

逃げる正義はバーを掴んだ右手にグッと力を込め、身体を引き寄せる。足りないスピードを左足でバーを蹴り付けることで補い、何とかタッチをかわした。

「三回目だね」

「ん？」

二人のオニゴッコをジムの下で眺めている勇が隣にいる奈緒人に心配そうに尋ねた。

「マーメイドタイン。正義君にかわされ続け

てる：このままじゃ負けちゃうよ」

正義のことを応援はしてはいるものの、負け

た時にリエ子へ降りかかるエッチなお仕置き

を心配していた。特に今回は勇や奈緒人に聞き

こえないように、リエ子に耳打ちする程の内容

らしい。

「確かに：アウトレインを絶えず動き回る

ことで委員長に技を使うタイミングをはずさ

せてる。無理にマーメイドタインを使っても

かわされてしまうな」

「それに山中さんの側面をキープして、通常

のインサイドからのタッチと勝負してる。あ

れなら胴体への二ポイントタッチより、手足

への一ポイントタッチの方が多くなるよ。タッ

チごと数える十秒も計算に入れると、今の

ポイント差だと時間切れになっちゃう」

「肉を切らせて骨を逃がすか、正義にそんな

作戦が思いつくとは」

「エッチしたいだけの直感だと思っけど」

「あの閃きは、きっちりむさん以上だな」

「感心と呆れるを同時に思う二人」

「へっ、いつまでも同じ技にやられる俺じゃ

ないぜ」

ポイント差は七ポイント、残り時間をき

ていた。

「マーメイドタイン！」

それでも懸命に追いつけるリエ子。

「マーメイドタインはかわされちゃうよ」

奈緒人を見つめる勇。

「心配無用。人魚はかわせても人魚の持つ矛

までかわせはしないさ」

目深にかぶった帽子の奥で、奈緒人の瞳がキ

ラリと光る。

「人魚の持つ矛？」

「その時だった」

「うわわわ」

大きな悲鳴があがる。

慌ててジャングルジムを見上げた勇の目に写

たのは腹部への二ポイントタッチをまともに

くらいながら呆然とする正義の姿だった。

「ど、どうしたの？」

勇が駆け寄ると驚愕の表情を浮かべた正義が

ポツリと呟く。

「曲げやがった」
「曲げた？」
言葉の意味が分からず聞き返すと、後ろで奈緒人がクスツと笑った。
「トライデントシャーク：新必殺技さ」
「新必殺技？」
「見てごらんよ」
十秒を数え終わったりエ子がジャングルオニを始める。
「やあっっ」
インサイドからの鋭いタッチを繰り返すリエ子をすんでのところにしのご正義。マーメードターンを封じる為、前後の立ち位置を避け側面をキープする。
「グルンッ」
リエ子がモーシオンに入る。回転した勢いとともに足元にあるジムのバーを蹴り上げた。
「おっとお」
慣性で泳いだ体を左手でバーでグツと掴み、ストップさせる。これでマーメードターンに對して平行となり、その攻撃範囲から外れるのだ。
「ビュンッ」
通常なら水泳のクイックターンのように身体を捻り込みうつ伏せに跳ぶのだが、リエ子はクロールの息継ぎのような半回転の捻りを残したまま飛び上がった。そして、前面が正義のブロック辺りに来たとき、真横になった状態のままバーを掴んだ。

一瞬の出来事だった。猫のように身体を丸めたかと思うと、真横のまま一回転し、バーを蹴りつける。マーメードターンのスピードのまま、横一回転の直角カーブをやったのけた。まだ、思いもよらぬ方向からの攻撃に正義はまたしても胴への二ポイントタッチを許してしまっていた。
「マグレじゃながったか：」
唇を噛んで、悔しがると正義。
「トライデントシャークよ。時間はまだ二分以上あるもん、三ポイント差なんかで逃がさないんだから」
「砂糖抜きガム？」
「エロイングリッシュ以外興味の無い正義が聞き返す」
「トライデントシャーク！それにマグレなんかじゃないんだから：って時間かせぎしないでよ」
慌てて十数え始めるリエ子がジャングルオニを再開する。
「近づいてくるリエ子に正義は逃げようとしな

「どうしたの、ケガでもしたの？」
「子の頭に正義はポンと手を軽く置いた」
「顔をしかめる。大きなタンコブが出来ていた。ケガをしてくるのは委員長の方だろ、大丈夫なのか？」



とすするが、ドラゴンファイヤーのあまりの速
さにトライトントシャーキーのタイミングが絞
り込まないのだ。呆然とするリエ子。そして
そのまま、時間切れとなるのだった。

「フウ：負けたよ。委員長の方こそすごか
「何言っ：紙一重の結果だ」
「二人はジャングールのネットにもたれかけ、大
「られた緑色のボールネットにもたれかけ、大
「きく息をついた。シャーキーまで破られるなんて
「トライデントシャーキーまで破られるなんて
「思わなかつたな」
「スゲー技だったな」
「「榎垣君の方こそ、ドラゴンファイヤーだっ
「け？あんな必殺技を残してたなんて」
「「いや：あれは：残してたなんて」
「「何故かバツが悪そうに口ごもる正義。そこへ
「奈緒人が割り込んで。口ごもる正義。そこへ
「「あれは使うな。冷静沈着を信条とする彼に
「詰め寄る奈緒人。冷静沈着を信条とする彼に
「しては珍しく、怒りもあらわだった。
「「ちよ、ちよとだろ、そんな大袈裟に怒る
「「なよ」
「「いいよ、七瀬君。私が力不足だったんだ
「「し、いもの、七瀬君。私が力不足だったんだ
「「じゃ、ないもん。ドラゴンファイヤー、カッ
「「コイ技だったよ」

「委員長：「顔を引きつらせる正義。あれは技なんかじゃない、
「「違うんだ委員長。あれは技なんかじゃない、
「「破滅の禁止手なんだ」
「「破滅の禁止手なんだ」
「「日常では使われないシリリアスな単語に戸惑う
「「リエ子」

「「おーおー、おーおーだ」
「「前が一番の成長期であるこの時期にあんなお
「「チャナ技を使っただけで身体に反動がきたらどうす
「「るんだ？ドラゴンファイヤーは特にヒザへの
「「負担が激しいんだ。大人に近い体重のお前が
「「使え続けられれば、ヒザを壊す可能性だってある
「「んだぞ」
「「「奈緒人君、駄目だよ。そんなケンカ腰じゃ
「「今にも跳びかからんばかりの奈緒人の服を勇
「「が引く張った。からんばかりの奈緒人の服を勇
「「「正義が謝る奈緒人。頭を下げた。使っちゃ
「「「悪かったよ。でもな、使っちゃいけませんよ。
「「「ジャングールのオニなんて馬鹿くさいコトにこ
「「「まで付き合ってくれない委員長の姿見たら、あん
「「「は抜けねえよ。トライトントシャーキーを始
「「「なスゲー技使われて、ジャングールのオニを始
「「「た張本人がヒザ壊すのが怖いから使いません
「「「だろ」

「俺がそんな奴だったら、嬉しいか？」
 奈緒：分かった。でも、ドラゴンファイヤー
 は滅多なコトでは使わないよ」
 卑怯な質問にソッポを向く奈緒人。
 「お前以外に使うとは思わなかったがな：
 でもさ、お前矛盾してるぞ。そんなに使わせ
 たくないんだったら、こんなに委員長を鍛え
 なければいいだろ」
 「そ、それは：」
 「案外、ドラゴンファイヤーを一番、使って
 みたいのはお前なんじゃないのか？」
 「そ、そんなコトあるか？」
 「ア：ま、いいけどな：心配してくれて：
 馬鹿っ！心配してるのは委員長のコトだ。
 お前なんか知るか？」
 「へいへい」
 「で、どんな猥褻行為をしようってんだ？」
 先程とは別の意味の迫力で正義に詰め寄る。
 「なに、言ってるんだよ奈緒人君。あんな名
 勝負を繰り広げた好敵手にそんなコト出来る
 訳ないだろ。俺のジャングルオニスピリッツ
 に反するぜ」
 「真っ黒じゃないか、お前のスピリッツは」
 「とにかくっ、こんな感動した試合の名誉
 ある敗者にエロエロなこと出来ないね。そんな奴は
 として男として俺は出来ないね。そんな奴は
 ゲスだぜ」
 急に紳士ぶる正義。

「ムッ」
 「大体、かんぐる方もゲスだね。男じゃない
 ね、ゲスゲスだよ」
 「ムムッ」
 「帰ろうぜ、勇。ここはゲス臭くていけねえ」
 「ムムムッ！」
 怒りを押さえながら睨む奈緒人を、まあまあ
 とリエ子がなだめる。
 「いくら俺でも負けた委員長に○○○なコト
 とか×××なコトとかさせるわけないだろ、
 △△△なコトぐらいはさせるかもしれないけ
 ど：」
 「正義君：ゲス臭いよ：」
 小声で呟く勇だった。
 「おっ邪魔しまーす」
 閑静な住宅街、色とりどりに塗られた一戸建
 の壁を夕焼けが橙色に染めてゆく。その中、建
 まだ白いペンキが新しく塗られたばかりの二
 階建てのブルジョワホームに少年が入って
 いく。
 「：：本当に来た」
 掃除の行き届いた玄關でリエ子が迎える。
 「委員長の為なら、例え火の中、家の中って」
 「あのね：だけど、いいの？七瀬君にあん
 なコト言っちゃって」
 「フン、親友を信用しないような奴には、あ
 れぐらい丁度いいんだよ」

しょ。慰めるって、友達が泣いてる時に泣かないで、優しくするコトだから、自分が泣いてる時、自分に優しくするコトで、自分が泣いてる時、委員長は難しく考えすぎるんだ。俺が単純明快、簡単簡潔に教えてあげよう。と、その前に！
 「その前に？」
 「自慰の意味を教授するには、それ相応の服装というものがあ。そんな不真面目な服装じゃ、教えられないな」
 「分かったわよ。着替えればいいでしょ」
 アンティークな可愛らしい洋服ダンスを開けるとよそ行きのツイースを引っ張り出す。
 「なにやってるの？」
 「なにやってるの？」
 榎垣君、部屋の外に出て、着替えだよ。そうだし、下着姿になるんだよ。服着てたら教えられないじゃん」
 「エッ！」
 「服着てやるのは上級者だよ。初心者は裸でお風呂場、中級者でも下着姿でベッドの中なんだぞ。服着たままなんて、十年早い」
 「で、でも」
 「リエ子、服の裾を掴む」
 「あっそ、じゃあ教えられないな。六年生にもなつて、自慰も知らないじゃ、学級委員、失格かな。あ、俺は教えたいんだけどな」
 「部屋を出ようとする。脱ぐから教えてっ」
 「分かったわよ、脱ぐから教えてっ」
 「ケケケッ、じゃなかつた。ホホウ、それなら」

教えてあげようかな」
 「グスン」
 正義の目の前でワンピースのファスナーをゆっくりと下ろす。
 ファサツ：
 ワンピースが絨毯の上に落ちると、白いシールが露になった。
 「可愛いわ、委員長」
 クスクスと正義が笑う。
 「こ、これでいいでしょ。早く教えてっ」
 「恥ずかしさに顔を赤くする。早く教えてっ」
 「礼儀がなくなってないよ、自慰の教えを乞うなら、礼儀正しくスリッパをめぐってパンツを見せながら、自慰を教えてくださいってお願いいしなきゃ」
 「：：：くっ」
 悔しげにスリッパをめぐりあげる。薄桃色にチェック模様、女児用の小さなパンティーが丸見えになった。
 「スリッパから薄く透けてたけど、やっぱりか、久しぶりだねピンクのチェック」
 「ア：：：見ないで：：：」
 「スリッパを掴む手がフルフルと震える」
 「見てくさいって、エッ、チな格好してるのは委員長じゃないか、ホラ、お願いは？」
 「リ、リエ子に自慰を教えてください：：：」
 「よく出来ましたと、それじゃあオナニーって知ってる」
 「オ、オナニーってよくクラスの男子が話し



てるやつでしょ。エッチな本を見ながら、オ
 チンチンに変なコトする。――
 「そう、なんだ知ってるんだ。自慰行為、
 つまりマスターベーションだよ」
 「？」
 「前に俺が委員長をオカズにしたコトがあっ
 ただろ、あれが自慰。年頃になると女の子だっ
 てあれと同じコトをするようになるんだ」
 「嘘っ、だって女の子にはオチンチン付いて
 ないわよ」
 「あのねえ、保体で習わなかった？：：って
 オナニーは習わないか：：ウー、口では説
 明しづらいんだよな」
 「チラリとリエ子をうかがい見る。」
 「：：いいよ。口で説明出来ないんだっ
 たら：：直接：：教えてよ」
 「もじもじとしながら、そう言いきった。
 「じゃあ、スリッパを脱いで、俺の前に座って
 くれる：：あ、正義の餌食になってしまっ
 今日も今日とて、正義の餌食になってしまっ
 リエ子だった。」
 「ホ、ホントにこれでいいの？」
 「パンティとソックスだけの格好で正義の腰
 の上に座られる。それはお父さんに座りな
 がらテレビを見る幼児のポーズだったか、半
 裸になっただ女の子がやると、なかなかイロっ
 ぽい姿だった。」
 「さてと：：」
 正義は部屋の片隅にあったコンピューターゲ

ーム用のコントローラーを一つ掴んだ。
 「ゲームするの？」
 「まあ、気持ちよくなるゲームかな」
 「そう言うコントローラーのコードをリエ子
 の腕に巻き付けた。」
 「あ、：：なに？」
 「まずはレベル1：：」
 「軽く縛り上げると、両手の塞がったりエ子の
 股間へと手をのばす。」
 「エ、エッチ！」
 「そのエッチを教えて欲しいって言ったのは
 委員長なんだけども：：」
 「パンティーごしにリエ子の女の子を右手で優
 しくまさぐる正義。左手が剥き出しになった
 可憐なオッパイに触れる。」
 「あっ！」
 「ビクッと震えるリエ子。」
 「どれどれ、あれから成長してるのかな？」
 「小さな膨らみをイヤラシく撫でまわす。」
 「胸は駄目だよ」
 「発育不良の胸にコンプレックスのあるリエ子
 は小さなオッパイを見られたり、触られたり
 するのを極端に嫌がるコトを正義は知ってい
 た。」
 「委員長がちっちゃなオッパイが丸見えだよ。
 フニフニってやわらかいな」
 「恥辱に耐えるリエ子の表情を楽しむ。」
 「あれっ、ッルペタちゃんにくせに感じやす
 いんだ。先ッぽコリコリしてきたよ」
 正義のイヤラシイ指使いがリエ子の胸の先端

に襲いかかる。つままれ、こねられ、嬲られる。ち、違う。コリコリしてないもん。弱々しい言葉で否定しても正義の指先にある幼い乳首は生意気にもツンと尖り始め、指先の愛撫を淫靡に求めるかのようだった。指先「ほくらは、オッパイの先っぽがツンツンって立っっちゃっただろ。勃起してると言っただよ。エッチな気持ちになるとこうなるんだ」慌てて否定するが、色っぽく上気した頬が全てを物語っていた。男の子はオチンチンを勃起させて、精液を出すんだけど」
「リエ子の胸はオチンチンじゃないもん、精液なんて出さないよ」
「くすっ。でも、ここはどうかな？」
正義はピンクと白のチェック柄の女児用パンティに右手をいきなり突っ込んだ。
「ひゃっ！」
「ビクッと身体を震わすリエ子。」
「委員長のオチンチンはどこかな？」
「女の子の秘所である股間を優しくまさぐる。」
「あっ：：そんな所にオチンチンなんてないよ」
「あれえ、こんな所に可愛い裂け目があるよ。」
「あ、いい？」
「言いながらも、すでに指先はスリットの左右の肉唇へとあてがわれている。」
「エッ？だ、だめえええ」

クチュリ：：。リエ子の十一年間、一度も開かれなかった小さな扉がこじ開けられた。もう「ゴメンゴメン。もう「あ：：ああっ：：」呆然と口をパクパクさせる。「お詫びに委員長のおチンチン、どこにあるか探してあげるね」
「浅いホールへ中指をゆっくりと沈めていく。」
「ダメッ、ダメなのっ」
「初めての異物の侵入にイヤイヤをするリエ子。だが、無情にも指は少女の秘園を探り続ける。」
「ここかな？」
「ひゃ：：アッ」
尿道口を探りあてられ、ピクリと反応する。「ここは？」
「次は臍口をくすぐる。」
「ん、んんっ」
「女の子が勃起するところはね：：ここだよ」
「クリトリスを指先でツンと軽く押してやる。」
「たまらず、リエ子の身体はビクッと震えた。」
「ひゃっ！」
「ほら、当たりだ」
「薄皮に包まれた肉芽を指先で優しく撫で回す。」
「触ったら：：ダメだよ：：」
「小刻みに震えながらも抵抗するが、両手が縛られていてはまならない。」
「自分で慰めるコトなんだよ。分かったかな？」
「エッチな委員長」



丁寧だがネットリとした指使いで、リエ子の
 小さな宝石を廻り続ける。リエ子、エッチじゃないも
 「ち、違うもん。リエ子、エッチじゃないも
 : : : : :」
 「あれ、え、どうしたの委員長？そんなに気持
 ちよさそうな声、出しちゃって：：それにコ
 コからも出てるよ。気持ちいいって液が：：
 ホラッ」
 左手をパンティーから抜くと、中指と人差し
 指を濡らす透明の液を見せつけた。中指と人差し
 「：：：：！」
 リエ子にはその液が何かは分からなかったが、
 女の子にとって、男の子に見られてもいい液、
 ではない。男の子の指ですくい取られていいもの
 ではない。愛液って言うんだよ」
 「これはね、愛液って言うんだよ」
 指先を上げると、わずかにぬめりのある液が
 細い糸のようになる。その光景がリエ子には
 何故か淫靡に見えるのだった。
 「愛液？」
 言葉の深い意味を知らず、無邪気に聞き返す。
 「そうだよ。人を好きになつて、その人と心
 も体も結ばれたら、思つた時に出てくる液、
 女の子の聖水なんだ」
 「人を好きになつた時：：」
 ハッとしながら、顔を真っ赤にするリエ子に
 正義が慌てる。顔を真っ赤にするリエ子に
 「こ、今回は俺の反則だからノーカンだよ。
 別に俺なんかを好きなんだから思い込んだら

ダメだぞ。もっとイイ男とかいっばいいるし、
 奈緒人みたいなカッコよくてイケベじゃない
 男を好きなんだって：：紛らわしいコト言っ
 てゴメンな」
 言つて悲しいものがある。しかし、リエ子
 の恋愛感情を踏みにじるコトは出来ない。性
 は弄んでも愛は弄ばない。エロ魔神、エッチ
 マスター、スパー変態と言われる正義でも
 譲れないポリシーだった。
 「桧垣君：：」
 「さてと」
 リエ子の両手を縛っているゲームコントロー
 ラーのコードを解いてやる。
 「もう、終わりの？」
 「あれ、終わりの？」
 「ち、違うもん。ただ：：やり方がよく分か
 らなかったから：：」
 言い訳しながらも、恥ずかしそうに股をもじ
 もじと擦り合わせる様子が可愛い。
 「：：じゃあ、自分でやってごらん」
 「え？」
 「自慰の実技テストだよ。俺が採点、添削し
 てあげるから。ホラッ、制限時間は三十分。
 テスト開始っ！」
 リエ子を抱きかかえると、そのままチョコン
 とフカフカのベッドに座らせる。
 「えっ？」
 「あ、そうだ。カンニング防止の為、パンツ
 は膝まで下ろします」
 有無を言わず、リエ子のパンティーをスル

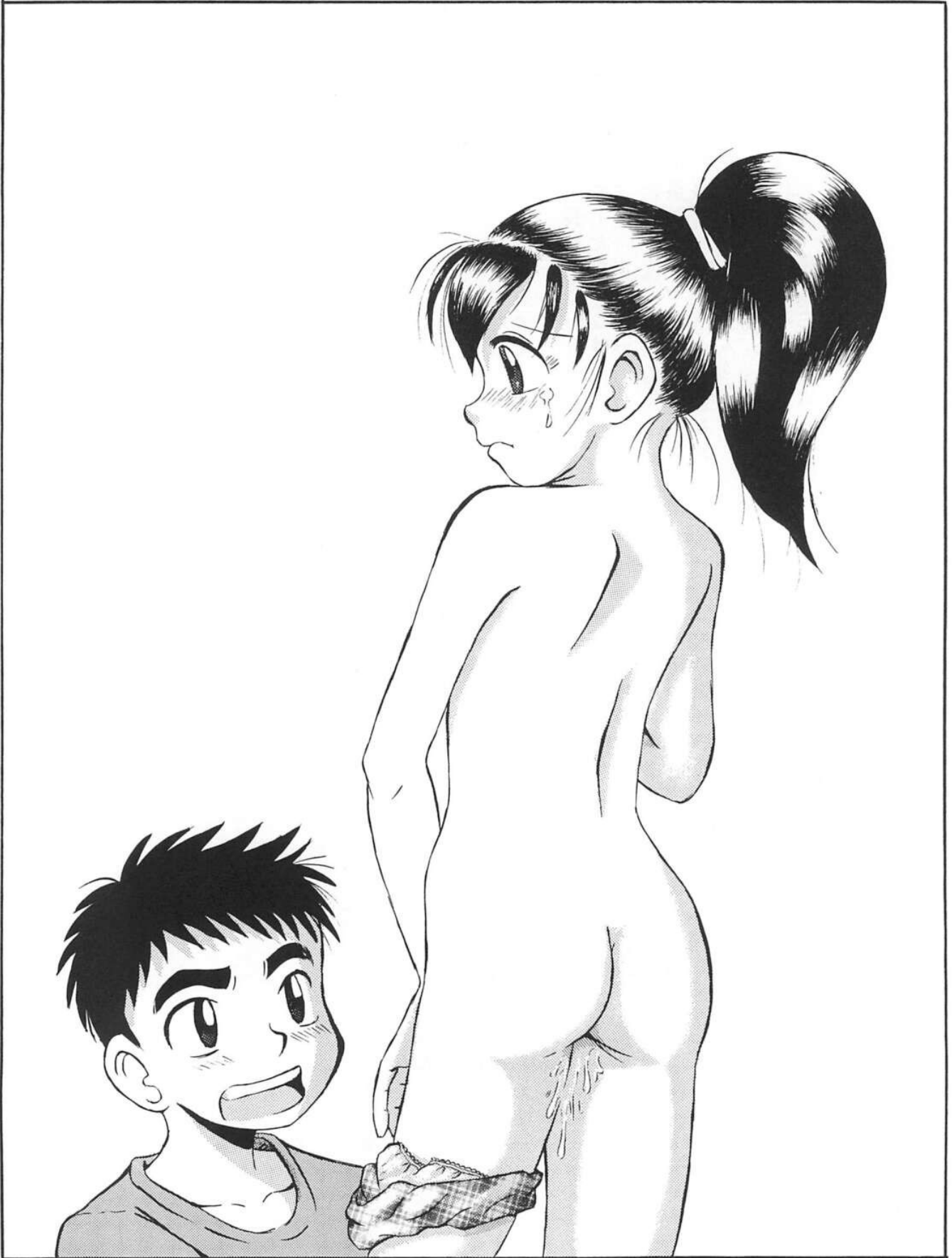
リと引き下ろしてしまふ。
 「えっ、ええっ？」
 「ほらほら、よそ見をしない。カンニングと
 みなしますよ」
 剥き出しになったお尻をペンツとはたかれる。
 「やんっ♥」
 「しょうがないな、補助するから後は自分で
 やるんだよ」
 戸惑うリエ子の左手を胸に、右手をアソコに
 持っていく。
 「ゆっくりと指を使っていく。
 「いいよ、その調子。オッパイはもつと優し
 くこね回して、スリットは深めに中指で撫で
 あげるようにこするんだ」
 「言わないでよう」
 恥ずかしがるリエ子。しかし、稚拙な愛撫で
 も十分もたつと、段々とその効果をあらわし
 始めた。
 「どう？気持ちいい？」
 「ちよ、ちよっとだけ」
 プクリと勃起した乳首が、リエ子のちよつと
 だけを否定する。指使いですら、言われて仕
 方なく動かしているものではなく、快感を求
 めて自制すらきかなくなってきた動きになっ
 ている。
 「委員長にはエッチな女の子の素質があるよ」
 「そんな：：：素質：：：アンツ♥」
 小学生とは思えない喘ぎが、唇をしめらす甘
 そうな涎とともにこぼれ落ちる。

「自慰のコトよく分かったかな？」
 「ウ：ンツ：ハア：イヤ」
 僅かにコクンと頷くものの、押し寄せる快感
 の波に悶える姿は幼い少女にはとても見えな
 い。
 「じゃあ、最後に女の子のオチンチン、クリ
 トリスをキュッて摘まんてごらん。すごく気
 持ちいいよ」
 「すごく：：：気持ちいいの？」
 濡れた腫が切なげに、とどめである絶頂を欲
 している。
 「摘まむ時、イクッて言ってごらん」
 「：イク？：ヒヤッ！：イクッ、イツ
 ちやうよお！」
 加減が分からず強めに摘まんてしまったりエ
 子は、電流の走るような快感の大波に一気に
 昇りつめてしままい、ビクビクと身体を跳ね上
 げさせながら軽く達してしまふ。
 ベッドから床へ倒れ込みそうになるリエ子を
 優しく抱きとめる正義。
 「実技テスト終了、後は採点だね」
 ハアハアと荒い息をつき、ぼんやりと余韻に
 浸るリエ子をソツと抱え上げる。
 「採点？」
 「そうだよ。実技は満点だけど、まだ九十点
 なんだ、残りの十点をプラスして百点満点に
 なるんだ」
 「残り？」
 「よし、じゃあ採点しよう。委員長、一人で
 立てるかな」



「えっ、ああっ！」
 裸の状態、抱きかかえられてるコトにやっと
 気が付くと、慌てて自分の足で立つ。
 「慌てるよ、こぼれちゃうよ」
 「こぼれちゃうよ」
 「それを採点するんだよ。そうだ、パンツが
 汚れるといけないな。着替えて手伝うような
 まるで父親が、幼い娘の着替えを手伝うような
 手際の良さで、リエ子の下着を脱がしてしま
 う。」
 「どうして全部、脱がさないの？」
 脱がされることも大きな疑問だったが、下着
 を片足だけ抜き取り、太ももに残った下着が
 垂れ下がって、いるのかは、更に大きな疑問で
 あった。
 「マナーだよ。オナニーマナー」
 「ようするに、楢垣君の趣味なんだ。」
 「採点します。アソコを指で開いてください」
 「アソコって？」
 「やだなあ、委員長が指でいたずらしてた所
 だよ。自分で慰めたアソコ」
 「で、出来るワケないでしょっ」
 「あ、そうなんだ。今度、京子ちゃんに教え
 てあげよう。委員長もやっとなんか出来るよ
 うになつたんだよ。オッパイもみもみし
 ながらアソコをいじってイクウって、しょ」
 「わ、分かったわよ。開けばいいんでしょ」
 「パツクリだよ」
 「もうっ、本当にエッチなんだからっ」
 覚悟を決め、指先を小さな肉唇に添えた。

「よっ、大統領！」
 「クチュ：：っ」
 少女の秘密があらわになっていく。
 「うわあ」
 皮に覆われていない秘肉は粘膜が剥き出しで、
 乾いた空気が丸見えだよ。いいのかな、こん
 なにすごいもの見ちゃって」
 「見ないで、委員長の大切なアソコがパツクリ開
 いて、可愛いサモンの色のお肉がヌメ
 ヌメ光るの、コトバツチン見えちゃうんだもん」
 「女の子の秘密を同級生に見せたくないと見られ
 ている。指も奥で挿げている。恥ずかしいと言われ
 ば、身体に奥で挿げている。恥ずかしい！始め、
 し、子の心を犯していき。肉壁がひくついた。
 リエ子の心を犯していき。肉壁がひくついた。
 ピクリ、あれ、ピンク色の幼い肉壁がひくついた。
 「あれあれ、はしたないかな委員長。見られて
 気持ちよくなっちゃたのかな」
 「違うよ、もんなら、アソコがジーンと熱くな
 恥ずかしそうに目をそらしてしまったりエ子。
 触らなくても、目には見えなくて、アソコがジーンと熱くな
 る。その時、出てきた。アソコがジーンと熱くな
 トロリとした液体が垂れてきた。花芯から湧



縦 川「本日はジャングルオニ・マーメイドをお買い上げ、誠にありがとうございます。1と2を合わせ、3を付けました総集編ですがお楽しみいただけましたでしょうか」

リエ子「ちょっと待って！」

縦 川「どうしたの、委員長」

リエ子「総集編で、私のエッチな写真ばかりじゃない」

縦 川「そうだよ。体育倉庫でオカズにされちゃった委員長とか、教室で女体実習をさせられちゃった委員長とか、家で強制オナニーをさせられちゃう委員長とか」

リエ子「言わなくていいのっ」

縦 川「淫乱小学生、エマニエル委員長の恥辱写真が満載」

リエ子「言わなくていいって言うてるでしょ、だいたい・・・ちょっと！何よコレ?!」

縦 川「スペシャルフルカラー中表紙だよ。サービス、サービス」

リエ子「だからって、この盗撮写真は何なのよっ！」

縦 川「この間の遠足でチョロっと出してる委員長をちょろっとね」

リエ子「ばかっ、バカっ、馬鹿っっっ」

縦 川「委員長の可愛らしいオシッコ姿、ほとぼしる黄金水、ご満足いただけますでしょうか」

リエ子「見るなっ、見ちゃダメェェェ」

縦 川「それでは、また次のジャングルオニでお会いしましょう」

リエ子「見るなぁぁっっっ」

縦 川「無茶な入稿でも印刷してくださる栄光様、不甲斐ない縦川に力を貸してくれるVeaux宇宙くん、オリジナルでしかも小説のこの本を買ってくれる読者の皆様、本当にありがとうございます」

☆奥付☆

誌名：JANGLE ONI Mermaid
 印刷：栄光
 発行日：2001年6月24日
 サークル：JO制作委員会
 絵師：Veaux宇宙くん
 連絡先：東京都三鷹市下連雀6-14-23
 第2春美荘202 石川方 縦川知恵

